

端野農業の移り変わり(その4)

ハッカ栽培の変遷

端野におけるハッカ栽培八〇年の変遷は三次にわたって、その盛衰がみられます。

〈第一次発展期〉

この期間は、分村前の野付牛村(町)時代で現在の端野町に属する作付面積は資料が無く不明ですが、野付牛村(含端野)の記録を見ると、明治三四(一九〇二)年、寒河江直助氏が栽培を始めて二年後の同三六(一九〇三)年には一・五倍の一・五鈴、五年後の同四〇(一九〇七)年には約八四倍の七九九鈴、九年後の同四三(一九一〇)年には、一〇〇〇鈴に達し、大正六(一九一七)年には、この期間最高の一七五三鈴という驚異的發展を示しました。

この發展を促進した要因に、明治四三(一九一〇)年、十勝の陸別から野付牛間の鉄道が開通し交通・運輸業務が飛躍的に發展し、農産物の流通が容易になったこと、また、道内や本州から北見地方のハッカブームに乗り、新規の入植者が増加したことがあげられます。しかし、大正七(一九一八)年から急激に減

反が始まり、同九(一九二〇)年には一〇一鈴余に急減してしまいました。この要因は、同三(一九一四)年に第一次世界大戦がはじまり、その影響で海外での需要が減退した反面、豆類・澱粉等の需要が増大し、輸出価格の高騰により、ハッカから豆類・馬鈴薯等に作付が移行したためです。

〈第二次発展期〉

この期間は、野付牛町から端野村が分村した大正一〇(一九二二)年から、太平洋戦争が敗戦で終結後の昭和二四(一九四九)年までの期間です。第一次世界大戦終結後、取卸ハッカ相場が回復するにつれてハッカの栽培が増反し、昭和六(一九三二)年には、一〇〇〇鈴余にもなり、同一四(一九三九)年ハッカは、端野史上最高の一七四八鈴余に達し、その後一〇年間は最盛期を誇った時代でした。それには次のような要因がありました。

・「品種の改良」

明治四〇(一九〇七)年、道立地方農事試験場北見分場が野付牛村に設置され、水稻、豆類、麦類、牧草のほか、北見地方の特産であるハッカに重点を置き品種の改良普及に取り組みました。

第一次発展期の品種であった青系・赤系などから、大正一三年(一九二四)年、「赤円(あかまる)」が育成され優良品種に決定されたのをはじめ、さらに増収が見込まれる品種として、昭和七(一九三二)年に「北見白毛」同一三(一九三八)年に「北進」が育成され、より作付が増加しました。

・「蒸留釜の改良」

ハッカは、刈り取った後乾燥させ、これを密封された釜に入れ、薪などを燃料にし蒸気を発生させ釜に送り込み、蒸された成分が蒸気とともに導管を伝わって冷却器で冷やすと、液化現象にともない「ハッカ脳の油分」が分離され、これを採取するのが「ハッカ油」です。ハッカ油を採取する機械を「蒸留釜」といいます。

北見地方でハッカ栽培がはじまった頃は、郷土の山形など先進地の経験を活かし、にしん釜と天水桶てんすいおけを応用した「天水釜」で蒸留していました。

大正期に入り、収油率を高めるため大型に改良し、昭和五(一九三〇)年、当時野付牛町川東の田中篠松氏が、従来の釜の蓋の内部を改良した画期的な「田中式蒸留釜」を完成させ、網走管内はいまでもなく全道各地で使われるようになりました。

敗戦後ハッカが衰退していくなか、その復興をめざし「農試式」という小型の釜が登場し、昭和三〇年代(一九五五〜一九六三)になってハッカ栽培が持ち直した頃に、より効率的な重油式バーナー蒸留機が開発され、このようなハッカ釜の改良がハッカの盛衰に大きな関わりを持っていました。

・「道営検査の実施」

ハッカの栽培時からの取引は、大手仲買商人や産地仲買人の不当な取引により生産者は痛めつけられていました。ハッカは脳分が高いほど良質とされていますが、当時は品質の基準が定められていなく、商人の言うまま

に決められていました。こうした障害を除き取引の明確化を図るため、昭和二（一九二七）年から北海道農産物検査所が脳分検査を行うようになりました。しかし、実施当初は商人の反対が強く、軌道に乗り出したのは同四（一九二九）年頃からと言われています。

・「ホクレンの進出とハッカ工場の建設」

本州大手商人の思うまま搾取され続けてきた生産者の惨状を改善するため、昭和四（一九二九）年、北見管内の九産業組合が北連（北海道信用購買販売組合連合会・ホクレン）に対し、ハッカなどの農産物の販売に対する支援とそのための北見出張所の開設を要望し、同六（一九三二）年に野付牛出張所が設置され、ハッカの販売事業を行うようになりました。

しかし、ハッカ再製施設（ハッカ油からハッカ脳を精製する工場）と輸出能力をもたないハッカ取引が、本州の商社に太刀打ちできないことを痛感したホクレンと生産者は、ハッカ工場の建設が悲願でした。

このような中、昭和八（一九三三）年一月、「ホクレン野付牛薄荷工場」を完成させ、翌九（一九三四）年から精製加工が開始されました。

創業以来生産者と共に、常に世界の情勢、市場の動向に対応し、北見ハッカの振興発展に大きな役割を担ってきました。

〈第三次発展期〉

第三次発展期は、昭和二五（一九五〇）年からハッカ栽培がされなくなった同五五（一九八〇）年までの期間です。

しかし、発展期とはいえ昭和三二（一九五七）年の作付面積は七三五畝にすぎなく最盛期の半分にも満たない面積でした。

その要因のひとつに、昭和三〇年代に入り、ハッカより所得が高い米作りのため造田熱が高まり、水利の良いところはことごとく水田になり、水利のない丘陵地帯では、揚水機によりポンプアップし水田化され、ハッカの作付が減少しました。

二つ目の要因は、外国産ハッカとの競合でした。ブラジル産ハッカは昭和初期日本からの移民よって普及したと言われており、ブラジルの気候・土壌に適し大きく繁殖しました。太平洋戦争時、日本からの輸出がありませんでしたのでブラジル産が世界の市場を独占し、戦後は台湾産ハッカの進出があり、日本産のハッカは極めて厳しい状況に陥りました。

三つ目の要因は、昭和三〇年代頃から合成ハッカの進出がありました。進出当初は原価が高く品質も劣り、天然ハッカが有利でしたが、合成技術の進歩により品質・価格ともに天然ハッカよりも割安となり、同四一（一九六六）年頃には、合成ハッカのシェアはほぼ五割を占め、さらに同四五（一九七〇）年には石油を原料とした合成ハッカの出現で、天然ハッカは対抗できなくなりました。

端野では、昭和五四（一九七九）年産をもってハッカの栽培が終息してしまいました

今、世界一を誇った北見ハッカの昔の姿をとどめているのは、ハッカの栽培では北見市北陽でわずかにみられるほか、北見ハッカ記念館ではハッカの栽培から精製までの資料や

道具、蒸留機などの展示があり、また、蒸留の実習と生まれたての香りを楽しむことができます。そのほか、北見市下仁頃町に「ハツカ御殿」があり、当時使用されていた蒸留機、農機具等が展示されており、当時の生活の一部を偲ぶことができます。

なお、端野町北登では、ハッカに代わる作物として、昭和五五（一九八〇）年から「しそ」を栽培し、当時ハッカ蒸留に使用した蒸留機を利用し現在も「しそ油」の採取をしています。



▼重油式バーナー蒸留機